小児保健看護

報告者：山本真充

教育及び実践の課題

平成24年度の小児保健看護実習Ⅱにおいて医療的ケアに関する3件のインシデントが発生した。インシデントについて分析を行った結果、学生の側面からは「報告・連絡・相談が不十分」「状況に合わせた判断ができない」ことが要因の1つであると考えられた。このインシデント分析結果やこれまでの臨地実習の状況を踏まえ、平成25年度から新カリキュラムとして開講される小児保健看護演習においてシミュレーション学習の導入を検討した。シミュレーション学習を導入するにあたり参考となる小児看護に関するシミュレーション学習の国内報告はまだ少なかったため、平成24年度に引き続き平成25年度も米国を中心とする国外の文献から検討を行った。

活用した論文の概要

Parker ら（2011）は、米国において臨地実習の代替としてシミュレーション学習が取り入れられてきている中で、従来の臨地実習とハイブリッド実習（シミュレーション学習と臨地実習の併用）での学習成果の差と、参加したシミュレーション学習に対する学生の認識について調査結果を報告している。研究参加者は看護学部小児保健コースの学生 41 名で、従来の臨地実習群とハイブリッド実習群へ無作為に割り付けされた。学習成果については科目の成績の平均で比較され、両群に有意差はなかった。シミュレーション学習に対する認識については、研究者らが開発した 3 つの尺度で評価され、シミュレーション学習は自分自身の学習にとって重要である、シミュレーション学習を通し技術の自信が増加したなどの結果が得られた。また、各尺度のスコアと参加者の年齢に正の相関があったことから、学生の生活経験がシナリオをイメージすることに関連することが示唆された。

教育及び実践への活用

小児保健看護演習に導入したシミュレーション学習は、臨地実習で学生が出会う可能性の高い場面を想定した 3 つのオリジナルのシナリオに基づくシチュエーション・ベースド・トレーニングで、各シナリオのテーマは 1）子どもの状態に合わせた情報収集、2）子どもの状態に合わせた対応、3）入院中の子どもの環境調整とした。シミュレーション学習のプログラム作成にあたっては、圧迫感のない雰囲気作りやシミュレーション学習での学生評価は行わないなど、平成 24 年度のシンセサイザーで検討した内容も取り入れた。シミュレーション後の学生の感想では、8 割以上の学生から肯定的な評価が得られた（図）。また小児保健看護実習Ⅱの履修後に行った調査では、「実習に先立って行われたシミュレーション学習は、あなたの実習でどのくらい役立ちましたか？」の問いに対し、「とても役に立った」「まあ役に立った」との回答が 9 割以上となっており、シミュレーション学習が臨地実習に即したものであったことが示唆された。今後はシミュレーション学習による学生の学習成果をどのように評価するかが課題と考える。

参考文献

Parker R A, McNeil J A, Pelayo L W, Goei K A, Howard J, Gunter M D. (2011). Pediatric Clinical Simulation: A Pilot Project, Journal of Nursing Education 50 (2), 105-111.

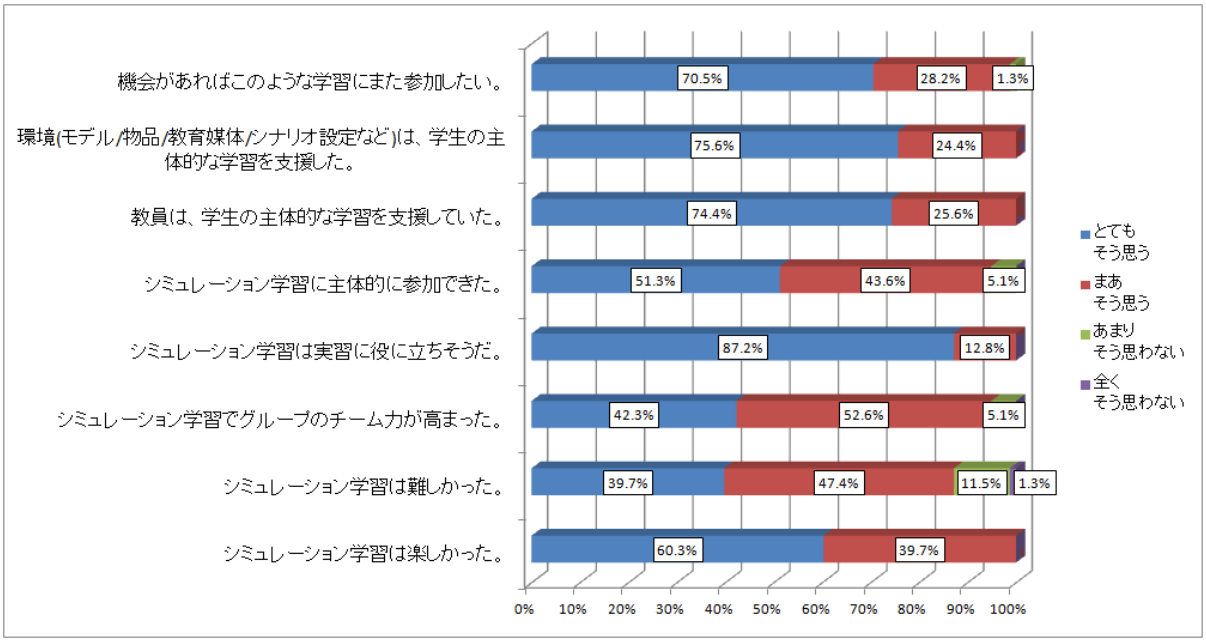

図　シミュレーション学習後の学生の感想（n=78）